HamaMed-Repository
浜松医科大学学術機関リポジトリ
浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

東と西：漢詩英訳の試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 信夫, 大木, 俊夫, Alexander, Martha Lee メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/187

浜松医科大学紀要　一般教育　第3号(1989)

東と西：漢詩英訳の試み

櫻井　信夫*・大木　俊夫**・Martha Lee ALEXANDER***
*衛生学・**英　語・***英　語

East and West: An Experiment in Poetic Translation

Nobuo SAKURAI*, Toshio OKI** and Martha Lee ALEXANDER***
*Hygiene ; **English ; ***English

Abstract. What follows is translation and interpretation of four short poems from the Chinese poetry of the Tang dynasty. We will present three versions of translation: the initial version given by Sakurai, who has also interpreted the original poems, the second version by Oki, who modified his translation from the viewpoint of a grammarian, occasionally referring back to the original poems, and the final version by Alexander, a native speaker of English. We have attempted to translate the Chinese poems into English instead of translating them into Japanese, chiefly because Chinese and English are closer to each other than to Japanese both in word order and in the sophistication of prosody and versification.

はじめに

われわれ日本人は古くから「史記」,「漢詩」等の中国古典に慣れ親しんできた。日本人の漢籍の学び方は初め直読法であったことは確かである。奈良時代，孝謙天皇の天平勝宝三年（751年）に成立した「懐風藻」[1]に，長屋王の佐保邸（作宝楼）で開いた新羅使人の送別の宴（聖武天皇神亀三年（726年）七月？）の席上，主人の長屋王，使人も共々漢字一字ずつの分配を得て，長屋王その他の人々がそれを詩の韻字として作った十首の詩が残されている。日本も新羅も大唐文学の影響下にあったが，それらを自分自身のものとして消化しようという努力と，其の跡を留める高度の漢詩の教養の高さを示しているように思われる。別の見方をすれば，当時の日本は，唐に追い付き新羅を追い越せと身構えた時代でもあった。此の時代，日本朝廷は新羅，渤海等を蛮国とみなしており，使節は差別と孤立の屈辱に耐えなければならなかった。長屋王がこうした外来人を対等の人間同士として処遇したことは，美文の修辞の中に別離の愁いの滲

み出ているものも見えることから推定し得る。恐らくは漢語を流暢にこなしたであろう文人長屋王が，其の時代にあって政治を越えて朝廷内で衆望を一身に蒐めたのも当然ではなかろうか。此の文化交流も，宇多天皇の寛平六年（894年）菅原道真を遣唐使に任命しながら，晩唐の政治的混乱，朝鮮海域の情勢不穏などの理由から停止された影響の許に，変質せざるを得なかった。

其の間においても，人々の思考は当然日本語法に従ったであろうから，次第に訓読の方法を発見し，日本の学問にいわゆる漢文の伝統の基礎が作られた。反面，遣唐使の廃止から外交的に漢語を宮廷内で話す必要性が失われたことにより，直読法は次第に廃れていった。其の後における訓読法の発達から，それ迄に無かった独特の漢文体の表現と日本語の語彙を豊なものとし，漢字かな混じり文の上に特異な日本文体の文化が形成されていったとも言えよう。それゆえ，日本における漢詩の観賞とは，訓読と言う日本語法のルールに従って漢字・漢文を日本語読みにし，共通文字として意味の繋がる綴り合せからの理解の上に構築した共感であった。そして，ここでいう理解とは，其の漢詩を作った当時の人々の感じ取った情感を理解しているかどうかと言うこととは関係無く，構築した共感の持ち主である日本人の其の詩についての理解を指すものであったと言うべきであろう。

欧米，ギリシャ，インド等の詩を観賞する時，其の詩人の国の言葉で読んで観賞するのは原則としてわれわれ日本人にも受け入れられており，日本語に訳した場合，通常其の原詩を併記しない。しかし，漢詩については原詩を訓読し，更に詩吟として朗詠する場合が少なくない為，それらの影響でもあろうか，原詩併記が慣習となっている。

ただ，訓読の伝統は，我々の先祖が残してくれた継承されるべき文化的遺産であり，それゆえにこそ，他の国々では殆ど見られない，本来異国文化である漢詩・漢籍についての一般教養が，国民全般に行き渡っているのである。しかし，中国語は，日本語とは全く異質の言語で，孤立語として一字一語それぞれ意味を持ち，単語配列の語順は英語と類似している。それらの文字を組合せた漢詩では押韻，平仄の厳しい格律を要求するが，このようなルールは日本の詩歌の作法にはなく，例えば，俳句に見られるように音韻の格律ではなく音数の格律と季を厳しく要求するのである。

明治の開国後，欧米文学者の中には，欧米詩の観賞法を普及しようとした際，詩人たちが原詩で用いた言葉がもつ本来のリズム，イメージ，詩語としてのニュアンスを追求することよりも，むしろ訳語の選択に重点を置いた者がいたように見受けられる。これは原詩の観賞という点からは問題の残る方法であったが，訳語の吟味，推敲を通してそれ以後の日本語，とりわけ韻文の語彙をより豊かなものにすることに貢献したと考えられる。

此の本来同一であるべき韻文が，音位，音性，音数という格律を厳しく守る原詩と，音数律にのみ依存する全く異質な日本詩歌，詩吟とに分かれてしまう特殊性は，千年前の中世においてもここ百年間の近代においても同一であることから，日本語に内在する韻文性の制約を示すものといえよう。詩吟の朗詠は，訓読による独特の文語体の韻文の中に見いだしたリズムと響

きの観賞に他ならない。

筆者の一人，櫻井は中学（旧制）時代，Ｆ（夫人が心の病いで，ご家族が郷里を離れた事情から，略）という国文学の教師に個人的指導を受けている間に，唐詩を北京官話で読み，英訳した上で日本語で読み下すという観賞法を教えられた。先入観を懐く前に受けたこの観賞法は，大きな影響を齎らして，一人ひそかに唐詩観賞の楽しみを続けることとなった。

最近，櫻井が小さなコラムに漢詩の英訳をつけたものを筆者ら三人で検討する間に，此の協同作業が，語法上単数，複数の表示が何れも曖昧な漢詩の日本語訳に，更に長年月不明な儘になっていた問題点に対し，明瞭な解答を与えるものとなることを見い出した。筆者らと同様の立場であったのか否かは判らないが，吉川幸次郎教授も唐詩の観賞の中で英語国民による英訳を引用して居られる。[2)]

本文は其の協同作業を検証し，また，同様の手続きを経た三首と，併せて四首を提示した。大方の批判を得たいと希望する。参考の為に，中国語の発音の標音を付けた。

第一例　「天皇陛下の崩御」

第1稿

1989年（昭和64年）1月7日朝早く，天皇陛下の御病い極めて篤く，為に崩御なされた。私達の青春の象徴であった。それまで昨年11月以来雨無く乾燥した太平洋岸に朝から九州より降り始め，夜数十日振りに雨足繁く，次の日も，次の日も亦，日本列島は雲に覆われて雨降り続く。天も涙しているのであろう。TVで見る新帝のお顔にふと放心の情の浮かんだ瞬間を感じ取る。同情と共感とを覚え，光と影の有ろうとも，将来を見詰められんことをお祈りする。唐詩を訳す。

渡漢江　　李　頻

嶺外音書絶　経冬復歴春　近郷情更怯　不敢問来人

Crossing the Han River　　Li　Pin

On the outside of ridges no news from my home,
One winter and one spring passed there.
Crossing river, approaching home and meeting people,
I dare not ask, however, the shining and shadow in my old town.

嶺外は嶺南を指す。黄河，揚子江流域の中国中央部（中原）から見ると大庾（ゆ）嶺の外の広東方面は僻遠の地であった。渡り鳥も此の嶺まで飛んで来ると此処から北に還ると，広東に左遷される途中宋之問が嘆きの詩を残している（707年）。李頻は宣宗の大中八年（８５４年）に進士に及第，非常に真面目で，次の懿宗により嘉奨され，歿後廟に祀られた程の人であって

処罰されて広東に行っていたとは考え難い。公務で旅行していたと考えるべきであろう。「近郷情更怯　不敢問来人」と知人が来ても故郷のことを訊ねないと言うのであるから，離れていた期間は，そのような態度をとっても不自然ではない長さの期間と考えられる。従来，「経冬復歴春」は，many winters及びmany springsと訳すべき複数年と解釈するか，漠然と「冬が過ぎ，春が過ぎ」と表現したとも言えよう。李頻の人柄を考慮して短期間の出張とすると，千年以上も前のことであり，上述の不自然でない旅行期間として「ひと冬」そして引き続く「ひと春」とするのが妥当ではないか。最近入手した輔新書局版「唐詩三百首」(1984年再版，台北)[3] 及び邱燮友著「新訳唐詩三百首」(1987年六版，台北)[4] では何れも，「経過了一個冬天，又一個春天」と語訳し，後者では更に作法分析で「家郷的音訊中断已両年了」と「復」に重きを置いて，冬，春をそれぞれ一年としている。「近郷情更怯」の「怯」はhesitateであるから，詩題をも考えて時間の経過を示し，crossing river, approaching home, and meeting peopleとし，更に終句にhoweverを入れた。

第２稿　Living beyond the mountain ridges, no news from my home comes,
One winter and spring passed there.
Crossing the river, approaching my home, and meeting the people,
I dare not ask, however, about the shining and shadow in my old town.

第１稿を櫻井と大木とで検討した。大木は唐詩について研究したことは無い。専門の英文語法を検討したが，櫻井が中原人の立場で嶺南を考えて（mountain）ridgesの外側のあの広東に居る間故郷からの音信が無かったと強調したのであったが，大木が故郷を離れて嶺を越えた其の土地で暮らしている間には，としたのは，中原人という先入観を持っていなかった為であった。此の詩は故郷の村に近づいた情景で作っているのであり，宋之問の詩における渡り鳥の居る中原側に重きを置いた解釈の方が自然である。両人は，従来の複数年の立場での訳詩の表現についても検討した。

最終稿

渡漢江　　李　頻

嶺外音書絶　経冬復歴春
近郷情更怯　不敢問来人

dù hànjiāng　lǐ pín
(Chinese pronunciation)

lǐngwài yīnshū jué　　jīngdōng fù lìchūn
jìn xiāng qíng gèng qiè　　bùgǎn wèn láirén

Crossing the Han River　　Li　Pin

Living beyond the mountain ridges, no news comes from my home.
Winter passed and at last spring!
Crossing the river, approaching my home, and seeing my friends,
I dare not ask about the shining and shadow in my old town.

第２稿を三人で，英詩の表現として此の英訳をEnglish nativesはどのように感じ取るかという立場で検討した。第１句において，comesの位置は詩作に捉われ過ぎているので，通常の語法通りとした。第２句は，前述のように，知人と会っても普通の挨拶だけで不自然でない期間としての「冬が過ぎ，さあ春が来た。故郷に還るのだ」という待ち望んだ季節到来の喜びの「叫び」として，at last spring!を採った。邱教授の両年説の根拠は判らないが，従来の復数年説と我々のいう単年説のどちらとも取れる立場であったものであろう。初めに書いたが，櫻井が中学時代に経験した，唐人本来の詩感を理解する為に北京官話で念唱し，英語に訳すことで解釈したＦ先生の教えようとしたことも，唐詩の孤立語ゆえの曖昧さを意識したことであったのを改めて認識した。また，故郷の村に近づき知人に会うことであるならば，meeting the peopleは使うことは出来ない，これは初めて会う人々を意味し，そこで前からの知人，友人に遇うのであるならばseeingでなければならないし，見知らぬ人々を指すpeopleも不適当であるとのAlexanderの意見は，今後の唐詩の英訳に一つの石を投ずるものであった。原詩の持つhesitationにこだわってhoweverを使用することも散文的で詩型を損なうとの指摘で削除した。

孤立語で綴られた唐詩の解釈を出来るだけ唐人を身近に理解し，長い年月を隔ててもなお唐代の詩人達の感懐を実感しようと，日本語読み下しを避けてEnglish naitivesと実施した此の協同作業は，三者三様の経験からの論議を引き出し，新鮮なそして筆者らがより正確なものと考える英訳を齎らすものとなった。

第二例　　**回郷偶書**　　**賀知章**

第一稿

少小離家老大回　郷音無改鬢毛摧
児童相見不相識　笑問客従何処来

Returning to old Home　　He Zhi-zhang

On a young day I left, I am old now in returning home.
Local accent as then, my hair changed thin.
The smiling children I meet do not know me,
"Where did you come from, Sir?" they ask.

第二稿　One day in my youth I left home
and　now I am returning home as an old man,
With my local accent unchanged and my hair turned thin.
The children I meet do not know me,
"Where are you from, Sir ?" they ask with a smile.

最終稿　回郷偶書　賀知章
少小離家老大回　郷音無改鬢毛摧
児童相見不相識　笑問客従何処来
huíxīāng ǒu shū　hè　zhī-zhāng
shàoxǐao líjiā lǎodà huí　xiāngyīn wúgǎi bìnmáo shuāi
értóng　xiāngjiàn bùxiāngshí　xiào wèn kè cóng héchù lái

Returning to my old Home　He Zhi-zhang
On a young day I left, I am old now in returning home.
My local accent unchanged, my hair turned thin.
The children I meet do not know me,
"Where are you from, Sir ?" they ask with a smile.

賀知章（659-744），字は季真。会稽（浙江省紹興市）の人。少年時代から詞文をもって名を知られた。則天武后朝（684-705）に進士及第。玄宗の天宝元年（742）李白と遇い，彼の詩作と人柄に感銘を受け玄宗に推薦し，李白が玄宗に登用される機会を作ったのであったが，その李白は僅か二年余りで長安を逐われて立ち去って行かなければならなかった。賀知章は晩年，放縦に流れたといわれている。８４歳の時，郷里に帰り此の詩を作る。此の詩は現在，台湾，香港，また大陸中国においても，小学校の児童達が暗唱する古詩であるという。彼は，此の詩を帰郷した日に作ったのではないか。帰郷したという安心感のみで，大きな喜びも無く子供達に旅人としてあしらわれたという寂しさもない。同じ訛りで話したことで，同郷人としての身近さを感じ，孫たちと話す祖父にも似た思いを味わったであろう。子供達は路上で手を繋ぎ，童歌でも歌っていたのではないだろうか。そして，さらさらと書き留めたので，偶書と題したのではないか。彼は道士となり，年老いて心も体も疲れていたものであろう，帰郷した翌年に死んだ。

若者は本来明日を夢見る存在である。望郷の切ない思いが強ければ強いほど，何時の日にか必ず故郷に帰ろうと強く思うものである。他方，老人は昨日の思い出のなかで生きる存在である。望郷の思いが帰郷の可能性に繋がらないことを知ることによって，切ない絶望に苦しむ。それ故，老人になっても帰郷する可能性がある場合には，絶望ではなくて望郷の切なさが増し

に増して日々その胸を掻きむしる。

櫻井の知人で青年時代に台湾から結婚したばかりの妻と共に日本に来て，先の大戦で日本が敗れた後，台湾に帰れなくなった人がいた。４０年間帰郷しなかった。息子，娘は台湾語を全く話さず，従って知人夫妻もまた日本語のみを日常使うことで台湾語を使わなくなってしまった。台湾の政治情勢が変わり，今は日本国籍となった二人が台湾の治安問題に巻き込まれる恐れが無くなった時，望郷の思いから帰郷した。４０年という歳月は彼の台湾語の記憶を直ぐには話せないほどに薄れたものにしただけでなく，体質までもが変わって，故郷の夏は唯暑いばかりで冷房の効いたホテルから外を眺めていた。春，気候の穏やかな晴明の季節の墓参に帰郷しようと思うと，毎年其の日の近づくにつれて切々と望郷の思いが彼を苦しめる。〝年老いた兄弟達のことを思って王維の詩を朗詠する〟と便りを呉れた。帰郷の日を楽しみにしつつも知人の心に潜む老い先への怖れを思い遣ると，其のことに触れてはならない〝老い〟の暗黙のルールゆえに書いて慰めることも出来ず，ただただ同情を禁じ得ない。

第一稿　　九月九日憶山東兄弟　　王維

独在異郷為異客　毎逢佳節倍思親　遥知兄弟登高処　偏挿茱萸少一人

The Double-Nine Festival on the Hill-top　　Wang Wei

I am a lonely stranger in a foreign town,
Thinking twice of my kindred on this festival day.
I know, my brothers are on the lofty hill-top, far away,
Each of them carries a branch of dogwoods but missing mine.

第二稿　I am a lonely stranger in a foreign town,
Thinking twice as much of my kindred on this festival day.
I know, my brothers are on the lofty hill-top, far away,
Each of them carrying a branch of dogwoods but without me.

最終稿　　九月九日憶山東兄弟　　王維

独在異郷為異客　毎逢佳節倍思親
遥知兄弟登高処　偏挿茱萸少一人

jiǔyuè jiǔrì yì shāndōng xiōngdì　wáng wéi
dú zài yìxiāng wéi yìkè　měiféng jiājié bèi sī qīn
yáo zhī xiōngdì dēng gāochù　biàn chā zhūyū shǎo yīrén

The Double-Nine Festival on the Hill-top　　Wang Wei

I am a lonely stranger in a foreign town,
Thinking twice as much of my kindred on this festival day.
I know, my brothers are on the high hill far away,
Each of them bearing their branch of dogwoods, missing me.

第三例　　静夜思　　李白

第一稿

牀前明月光　疑是地上霜　挙頭望明月　低頭思故郷

Thought in the quiet Night　　Li　Bo

Moonlight sprays so glorious around my bed,
I wonder it could be hoar with frost on the ground.
Lifting myself, the bright moon I find,
Lowering my head, I think of my old home far away.

第二稿

Thought on a Silent Night

I wonder the ground is hoar with frost,
So gloriously the moonlight pours around my bed.
Looking up, a bright moon I find,
Lowering my head, I think of my distant home.

最終稿

静夜思　　李白

牀前明月光　疑是地上霜
挙頭望明月　低頭思故郷

jìngyè sī　lǐ bó

chúangqián míng yuèguāng　yí shì dìshàng shuāng
jǔtóu wàng míngyuè　　dītóu sī gùxiāng

Thoughts on a Quiet Night　　Li　Bo

Moonlight pours so glorious around my bed,
I wonder, whether it could be hoar-frost on the ground.
Looking up, a bright moon I find,
Lowering my head, I think of my distant home.

李白（701-762）。字は太白，蜀に移住した胡人の商人の子として生まれたといわれる。青年時

代，大志を抱いて友人と共に故郷蜀を離れた。友人は洞庭湖畔で病死した。以後，彼は再び故郷に帰ることは無かった。彼がどのように才能に恵まれていたとしても，商人の子に，まして胡人の子であることが明らかになれば，進士の試験を受ける資格は与えられない。彼は酒を愛し酒仙といわれたが，これとても，胡人ゆえの苦悩のカムフラージュとして酒を飲んでいる内に，性となったのではなかろうか。彼は長安に出て，賀知章に遇って其の推薦で玄宗に翰林供奉に任ぜられた。彼の優れた才能と，冷ややかな胡人差別の中で培われた独特の資質と観察力とから，たちまち玄宗の異例の殊寵を克ち得た。四十数歳になるまでの放浪の後の好遇であり，得意になるのも無理からぬことであろう。それまで近侍して，帝の関心を得ていた権臣，腹心達の嫉みも少なからぬものがあったに違いない。二年余りの後，酔って，宦官の高力士に絡んだことを恨みに思われ，しっぺ返しに楊貴妃に讒言された。夜伽(よとぎ)で玄宗に告げられたのであろう，彼は宮廷を逐われた。李白が僻遠の蜀という田舎の胡人の商人の出であったことで，恨みが増幅され陥れられたのではなかろうか。

李白が何故に故郷の蜀に帰ることが無かったのかは，若き日に何故に故郷を離れたかということと共に，歴史の彼方に消えて，知るすべもない。気の向く儘に各地を放浪し，多くのエピソードを残した。晩年，当塗（安徽省当塗県）県令の親族の許に身を寄せ，粛宗の宝応元年十一月（762），そこで死んだ。

彼の悲しみの歌は，いずれも胸の潰れるような愁を伝える。誰にでも解る文字を綴り，遂に帰ることの無かった故郷への思慕を詠んだ此の「静夜思」は，もっとも人々に愛誦された懐郷の歌の一つであろう。

結　び

詩の翻訳に対して否定的な見解がある。小説を翻訳することには意味があるが，詩の翻訳には余り意味が無い，というのである。詩には，自由詩を除けば，それぞれの言語に特有の伝統的な形式が存在し，此れを他の言語に翻訳することは不可能である，と言うのが主な理由である。言葉の芸術の形式的な面にこだわれば，確かに其の通りであろう。しかし，如何なる芸術であろうとも，芸術は創造と共に観賞を伴う。そして，観賞を支えるのが解釈であり，芸術によっては，作品に接して呼び起こされる言語化されない感情をも観賞というべきものが有ろう。とは言え，言語化しなければ其の感情を他者に伝えることは難しい。此の言語化は，解釈と言うべき行為にほかならない。翻訳も亦，此の意味で解釈といえよう。原作の言語とは異なった言語を以て，しかも，可能な限り原作の形式に対応する形式を翻訳言語に求めて行なう解釈である。

先に触れたように，我々が漢詩の翻訳を伝統的な訓読法に拠らずして，孤立語である中国語を英語に翻訳することで，語順等の形式においては原詩に近づく。英語は，本来屈折語であり

ながら中期以来次第に屈折を失って其の統語法を殆ど語順に依存し，孤立語に接近している。しかし，いまだ屈折語の特性をも残している英語は，孤立語や日本語のような膠着語では曖昧になり勝ちな単数複数の概念を明確に解釈する。従って，漢詩の英訳に際しては，其れが作られた当時に遡って，其の詩人の置かれた背景その他をも深く考察しなければならない。こうした方法を実践する為に，青年時代以来漢詩を趣味として折りに触れ北京官話で念唱し，時に応じて英訳によって解釈することに独り興味を抱いて来た櫻井と，戦後に学校教育の大半を受けた平均的な日本の知識人として，漢文化よりも欧米文化，とりわけ英語に関心を向けてきた大木，更に二か年の中国生活の経験はあるが，其のすべての教養を英語圏で身に付けたAlexanderの三者の協同作業は，本文の第一例に詳述した通り，思い及ばぬ新鮮な結果を齎らしたように思われる。日本人，欧米人による漢詩英訳の例はあるが，全く立場を異にした今回の我々三人のような漢詩英訳の協同作業の例を，我々は寡聞にして知らない。そして，我々三人は誰一人として漢詩の専門家ではないという，いわば欠点を共有する反省から，特徴ある新鮮な表現を得ることが出来たものと考えている。大方の御叱正を得られれば幸いである。若し，読者の共感を得て，今後も機会を与えられるならば，我々は此のような作業を継続したいと願って居る。

文　献

1）小島憲之校注：懐風藻，他．日本古典文学大系６９．岩波書店，1964.

2）吉川幸次郎，三好達治：新唐詩選．岩波書店，1952.

3）輔新書局：唐詩三百首．再版．台北：陽明書局，1984.

4）邱燮友：新訳唐詩三百首．六版．台北：三民書局，1987.

（平成元年１月31日受理）